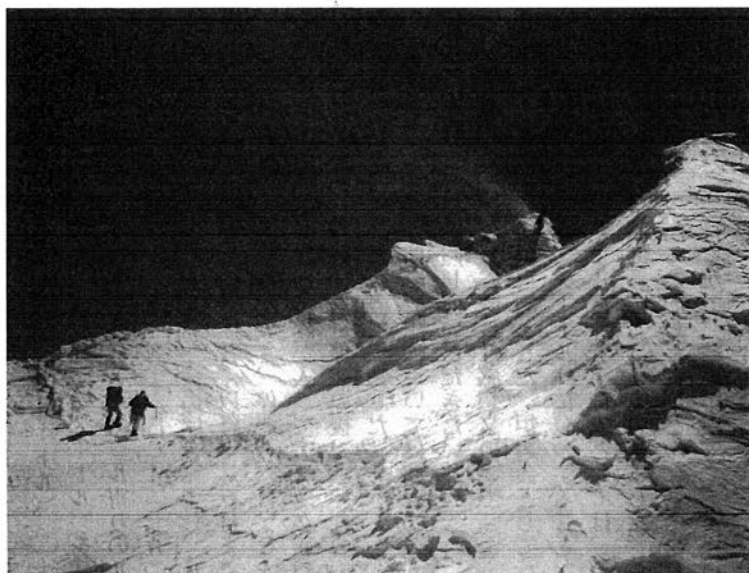


41 年ぶりのマナスル再訪

明治大学マナスル登山隊 1997 総隊長・大塚博美



下山する第1次アタック隊 奥がマナスル山頂 撮影・山本篤

明治大学マナスル登山隊一九九七の総隊長として、四十一年ぶりにマナスルを再訪する機会に恵まれた。しかも、八名全員とシェルパ三名計十一名の完全登頂という思ってもみなかったプレゼントをもらい、私の人生最良の年となった。

私の日記によれば「カトマンズ、ホテルヒマラヤ、十月十日、九時四十分、マナスルから下山し、エーリエントのコスモトレックに到着した小西隊の山本正嘉氏から連絡があり、『明大隊全員無事登頂しました。おめでとうございませう。他にも多くの隊が入山していましたが、明治だけが非常にしっかりした登山をしておりました。完全成功したのは明治だけでした。三谷、山本両氏のリーダーシップ、隊員が皆強かったです』の連絡を受け、早速東京本部へ連絡。河野本部長も興奮す」とある。

独りで「やった、やった、やった、ぞ、全員登頂とはできすぎだ」と、言葉にならない喜びで胸がいっぱいになったことを覚えている。

思えば四十一年前、シェルパのペンバズンダと七九〇〇メートルまでのルート工作のため登って以来、頂上は遠い夢となっていたが、今若い後輩たち（なんと学生三名も！）によってそれが果たされ、明治大学炉辺会主催としての八〇〇〇メートル峰登頂の記録も達成された。

今秋のマナスルには八隊（日本三、外国五）入山した。明大隊は三谷統一郎隊長（四十一歳）、山本篤登攀隊長（三十四歳）、原田暁之（三十一歳）、広瀬学（三十歳）、高橋和弘（二十三歳）、豊島匡明（二十二歳）、加藤慶信（二十一歳）、関裕一（二十二歳）、サーダー・パルテンバ（四十八歳）、他シェルパ五名、隊員の平均年齢は



1998 年 (平成 10 年)
2 月号 (No.633)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

41年ぶりのマナスル再訪……………	1
第3回登山と高所環境に関する国際 医学会議……………	3
カンチェンジュンガを目指して…	5
第3回全国大学山岳部監督会議…	5
追悼・大屋悌二さんを偲んで…	6
海外の山……………	8
支部だより	
宮崎支部・三秀台に響いたアペマ リア……………	7
山梨支部・設立50周年記念集会	8
福岡支部・40周年記念雲南の旅	9
北海道支部・第1回作品展…………	10
東西南北	
大正2年の上高地こぼれ話…………	11
楼蘭探訪……………	12
芦生の森を歩く……………	12
記念の年……………	14
インターネットの利用あれこれ	14
新入会員・ルーム日誌……………	15
図書紹介……………	16
『空へ』『等三角点の山々』『奥 多摩の尾根と沢』『上高地の谷か ら』『北海道森と川からの伝言』	
図書受入報告……………	17
会務報告・会員異動……………	18
INFORMATION……………	19

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日 10～20時
水・金曜日 13～20時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日 13～20時

二十八歳である。

十月八日、快晴、待望のアタック日和、気温零下三〇度。第一次隊三谷、山本、高橋、豊島、加藤、パルテンバの六名は、C4(七五〇〇メートル)五時出発。極寒と強風の中、酸素を使用しながら堅氷のプラトリーを快調に登る。七七〇〇メートル付近から腰までのラッセルとなり、苦勞する。頂付近は雪稜のコブがいくつも続き、思わぬ厳しい様相。二ピッチのフィックスと一ピッチのスタカットで雪を削り落とし、交替で頂上に立つ(九時四十分)。あとは一気にC1(五八〇〇メートル)まで下る。C2とC1の間は胸までのラッセルで、下部の大量の降雪を知る。

翌九日、晴れ後雪、零下三〇度。第二次隊原田、広瀬、関、シエルパ二人の計五名、五時出発。酸素を使用し、寒気と強風の中、前日のトレースをたどり、九時十五分登頂。後各キャンプ、フィックスドロップを撤収しながら下山。全員十日にBCに帰着。以降ラルキヤ峠越えのキャラバンを経て、十月二十日カトマンズ到着。マナスル登山を終了する。

すっかりした極地法のタクティックスでロジスティックスを確保し、スピーディーな登山を展開した。行動日程は九月八日BC入り、十四日

C1(五八〇〇メートル)、十九日C2(六三五〇メートル)、二十三日C3(六九〇〇メートル)を建設。プラトリーへはノースコル寄りのルートをとる。二十六日C4(七五〇〇メートル)へ荷揚げを完了し、BCへ下山、休養。以降十月三日まで悪天降雪が続き、停滞。六日、C4、C3に各隊が入ってアタック態勢が整い、一日停滞の後、八、九の両日にわたって登頂した。

他の七隊については別表リストを参照していただきたい。

三谷隊長は感想文の中で「……当初の目的とした、炉辺会として八〇〇メートル峰に登頂することができました。若手育成としては、全員高度順応もうまくいきました。これから参加した者がどんな登山をして行くかで、結果が出てくると思います。……(今回の結果は)できすぎだと思っています。しかし、十月八九日の好天がなければ、後日の降雪を考えると失敗していたかもしれせん。やはり、山登りには幸運が必要だと思っています。……」と述べている。

経験豊富な隊長は、今時マナスルに登って記録云々とは思ってはいない、むしろヒマラヤ登山は天候次第だ、と述べているところに千鈞の重みがある。

他隊の中では米国の二人隊のみが完登を果たしている。各隊がそれぞれの目的を持って自由な登山を行った。結果については各隊が厳粛に受け止めることだから、今更他から批評はできない。

我々の登山方法がベストだとは思っていない。しかし今秋のマナスルの悪天候のコンディションの中できちんと結果を出すにはどんなタクティックスが最適なのか、また同じ方法を取っていても結果にばらつきが出てくるということは何を物語っているのか、今後の登山に大いに参考となる点である。

マナスルには今秋を含めて今まで百隊にのぼる登山家が、七ルートに輝かしい登攀記録を残し、哀歎に満ちた山と人間のドラマを刻んでいる。「日本の山」といわれたこの山には初のつく日本隊の記録が数多くある。

JAC登山隊初登頂の一九五六年以降を見ると、七一年北西壁バリエーションルート初登頂(都岳連・L高橋照)、七四年女性初登頂(L佐藤京子)、八一年秋アルパインスタイル酸素なしの初登頂(L加藤保男)、八五年冬期アルパインスタイル酸素なし初登頂(L山田昇、斎藤安平の二人)など。とくに記憶に残るものに、初登頂三十周年の冬に、山頂から植隊長ら十二名の名前の入ったピ

’97秋マナスル登山一覧表

隊名(国)	隊長	人数		登頂者		死者		登頂日	ルート	酸素	結果
		M	S	M	S	M	S				
明治大学(日)	三谷統一郎	8	6	8	3	—	—	10/8.9	北東面	有	全員登頂
小西隊(日)	小西 浩文	2	3	—	—	—	—	10/8	北東面	なし	7700m
鈴鹿隊(日)	中村 金夫	4	8					10/12	東稜	なし	6300m
スイス公募隊	チャーリー	10	6	2(1)		—	—	9/24	北東面	なし	ガイド1・ゲスト1
US(米)		2	0	2	—	—	—	9/27	北東面	なし	全員登頂
バスク(スペイン)	ホニトク	8	5	4	—	—	—	10/8	北東面	なし	全員凍傷・ヘリ救助
スロバキア		11	3	3	—	2(2)	—	10/8	北東面	なし	リーダー凍傷・ヘリ救助
オーストリア		11	4					10/13	北東面	なし	6900m

注：(1)ガイドリーダー1、ゲスト・エクアドル人1 (2)C3～C4 Fix凍死1 頂上付近行方不明1 M=隊員 S=シエルパ



10月8日9時40分登頂

イス缶を持ち帰ってきた故山田昇氏
が、JACRルムで故今西壽雄会長
ら当時の隊員に、それをプレゼント
したエピソードがある(会報四九〇
号)。登山の変遷、技術の著しい進
歩を物語るものとして私の心に焼き
ついている。

私が参加した、第三次マナスル登
山隊の残した大きな遺産は過去のも
のであるが、それでも今なお遺訓と
して活用され、優れた光彩を放つて
いるものもある。その一つに『ロジス
ティックスを確保せよ』という方法
がある。これはあらゆることに共通
する成功の手段である。明大隊は当
初からキッチリ結果を出すす旗色を
鮮明に示していたので、私はそれな
りの成果はあると思っていた。今回
後輩たちがマナスルを侮らず、自分
たちの日頃やっている一番手慣れた、
背丈にあった登山方法でガッチリ
やったのを見て実に爽やかな思いだ。
誰が、どんな山へ、どんな流儀で
登ろうとそれは自由だ。それぞれの

目標に対してキッチリ結果を出せば
それでよいのだ。他人の流儀に理屈
を挟むことは不要だと思う。

継続して登山を実践し、力を養い、
こころの一番のときのための必勝の型を、
奥の手を持つべきだ。それなくして
登山の明日はない。

今回マナスルに続く冬のアンナプ
ルナI峰の登山も炉辺会が応援した。
これはマナスル登山とは内容の全く
異なる登山である。マナスルで高所
順化できた隊員三人で、無酸素、シ
エルパなしの速攻でやりたいとの山
本篤の熱意に、若い高橋、豊島が賛
同して行われた。

十一月二十三日、山本ら三名はア
ンナプルナ北面BC入り、登山準備
十二月一日、冬のシーズンオープン
すこぶる順調に進み、六日C2・六
〇〇メートルまで進むが以降、B
Cで二メートル余の大量降雪、C1
では大雪崩の洗礼を受け、危険を感
じ早番に中止を決定。冬のアンナプ
ルナは六〇〇メートルで終わった。
ヒマラヤ八〇〇〇メートル峰の秋
・冬連続登山の野心的な試みは、厳
冬のアンナプルナの悪天に見舞われ
一撃で打ち砕かれた。

明治大学炉辺会会員による残され
た八〇〇メートル峰四座のうち、
アンナプルナは未完の課題として残
ることとなったのである。

第三回

登山と高所環境に関する国際医学会議

(一九九八年五月二十日～二十四日)

医療委員会 増山 茂

「第三回登山と高所環境に関する国
際医学会議(会長・中島道郎)が一
九九八年五月、松本市において開催
されます。国際登山医学会(I S M
M)と日本登山医学研究会が共催す
るもので、第三回とあるのは、この
国際医学会議が一九九四年のラパス、
一九九六年のクスコに次ぐ国際会議
であることを意味しています。

この領域の世界会議としては、西
暦奇数年にカナダのレイクルイーズ
で開かれてきた世界低酸素会議(一
九九七年で第十回を迎えた)が有名
ですが、偶数年に世界各地を回ろう
と企画されたものです。西暦二〇〇
〇年にはチリが立候補しています。

■低酸素の基礎医学

この一連の会議が低酸素や低圧の
研究での世界の最前線です。北米・
南米・欧州・アジアの各国から多数
の参加希望が寄せられています。ア
ジアと南米の高地住民の人類学的比
較をするP M・ホチャチ博士(カ)、
新しい長期低圧実験を報告するJ・
リシャレ博士(仏)の特別講演、その
他にも登山、高所医学と関連する基
礎医学研究部門のプログラムにもそ

うそうたる顔ぶれが登場します。

■高地居住民・健康と環境

学術的な面だけではありません。
高い山とそこに住む人々がいる国・
地域の方々にもなるべく参加してい
ただきます。ネパール、チベット、
ブータン、カラコルム、キルギス、
ペルー、ボリビアなどの代表に、各
地の事情を報告してもらいます。

乏しい酸素という条件下に生きる
ということとは、私たちの老化と死に
貴重な示唆を与えてくれるでしょう。
また、登山などで、彼らの伝統的な社
会的、経済的基盤に外的圧力を加え
てきた私たちは、その変化のありよ
うを謙虚に聴く義務があるでしょう。

■登山のための医学

登山者に実践的な医学的指針が求
められるのはこの領域です。以前は
手探りだったこの知識、今では体系
化、標準化が進められています。

一九九三年、レイクルイーズの世
界低酸素会議は、曖昧だった「急性
高山病」をはっきり定義し、その重
症度分類を提唱しました。同年UI
AAの医療委員会は、この急性高山
病への標準的対処法を勧告していま

す。現在では、欧米の高所登山隊・トレッキング隊には、この二つの指針はほぼ受け入れられています。わが国ではまだ「ベテランの勘」に頼る傾向があります。欧米に追従する必要はありませんが、世界の常識は押さえておきたいものです。

「トレッキング・遠征登山のための医学講座」を用意します。高度順化の方法、低体温症への処置、フィードでの鎮痛麻酔など実践的な内容です。

■山岳救助の方法論

これも欧米と日本とで差のある部分です。自治体・警察・山岳ガイド・山小屋・医療機関・山岳団体などを結びつけるシステムこそ問題なのですが、スイス、フランス、アラスカの山岳救助の専門家に参加してもらいます。ネパール、カラコルムの救助組織からも意見を聞きます。

会議終了後、涸沢で長野県警山岳救助隊による山岳救助訓練もご覧いただけます。

■市民向け公開講座

今回はエベレストシリーズ。高山病で有名なP・ハケット博士、メスナーと行を共にしたO・エルツ博士、北壁にその名前を残すTF・ホーンバイン博士、日本からは田部井淳子さんと日本山岳会の斎藤惇生会長。

この国際医学会議、第十八回日本

登山医学シンポジウムと同時開催です。日英の同時通訳が用意されます。なお、国際山岳写真展も同時開催。会議に参加した外国人登山家、医師との合同穂高登山も計画中です。第三回登山と高所環境に関する国際会議

名誉会長 ハウストン(米)

上田五雨

会長 中島道郎

副会長 リシャレ(仏)

齋藤惇生 大森薫雄

栗山喬之

日時 五月二十日(二十四日)

場所 ホテル・ブエナビスタ

(JR松本駅徒歩五分)

松本市本庄一〇二一

TEL・〇二六三―三七〇二一

FAX・〇二六三―三七〇六六

参加費用

国際医学会議・日本登山医学シンポ

ジウムの両方

ISM M会員 二万五千元

非ISM M会員 三万円

学生 一万円

日本登山医学シンポジウムのみ

会議登録費 五千元

懇親会費用 五千元

記念行事および記念山行

①五月二十五日(月) 涸沢カール山岳

救助技術供覧・六千元(テキスト、

宿泊費、懇親会費を含む)

②五月二十五日(月) 上高地・安曇野

一日ツアー・実費

③五月二十六日(火) 奥穂高登山

資料請求・連絡先

小林俊夫 信州大学第一内科

松本市旭三一一一

TEL・〇二六三―三七二六三

FAX・〇二六三―三七二二二

e-mail

toshi39@gipac.shinshu-u.ac.jp

増山 茂 千葉大学医学部呼吸器

内科

千葉市中央区亥鼻一八一一

FAX・〇四三―二六二二七六

e-mail masuyama@med.

m.chiba-u.ac.jp

インターネット URL:

<http://www.m.chiba-u.ac.jp/class/respir/ismm98.htm>

プログラム

●特別講演

①J・ウエスト(米) 長期間かつ

間歇的低酸素に暴露されると

②PW・ホチャチカ(カ) 人類の低

酸素に対する耐性：機構と環境因子

③J・ミリッジ(英) 英国エベレ

スト医学実験隊一九九四

④JP・リシャレ(仏) 第三回エ

ベレスト作戦

⑤久保恵嗣(日) 日本アルプスに

おける高度障害の実態

●高所トレッキング・遠征登山のた

めの医学講座

①F・ベルグホルト(奥) 高度馴

化の理論と最適な実践法(増山)

②B・デュラー(ス) 低体温・

凍傷に対する救急措置法(金田)

③U・ウイゲット(ス) フィール

ドでの麻酔法・小外科手術(佐藤)

●市民公開講座

「登山の楽しみと高所医学の役割」

①P・ハケット(米) 登山そして高

所環境

②田部井淳子(日) エベレストへの

道―頂に立った日

③TF・ホーンバイン(米) エベレ

スト今昔―エベレスト西稜

④O・エルツ(ス) エリートヒマラ

ヤクライマー列伝・メスナーとその

時代

⑤斎藤惇生(日本山岳会会長) 中高

年からの登山の楽しみ方

●特別講座・登山医学の歴史

ハウストン(米)、モンヘ(ペ)、ウ

エスト(米)、リシャレ(仏)

●主なシンポジウムテーマ

①長期間の低酸素の影響・慢性高山

病の新しい概念

②世界の高地居住民

③慢性疾患患者の高所滞在

④急性低酸素による障害―特に高地

肺水腫・脳浮腫―成因と対策

⑤出産・周生期と低酸素環境

⑥高所での運動・トレーニング

カンチェンジュンガを目指して

日本山岳会青年部
カンチェンジュンガ登山隊 1998
隊長・谷川太郎

このたび、私たち日本山岳会青年部では世界第三位の高峰カンチェンジュンガ(八五八六メートル)の登山を計画いたしました。

一昨行われたK2(八六一一メートル)登山隊では、十二名という大量登頂者を出し、なおかつ無事故のまま終了することができ、大きな成果を得ることができたと考えております。

しかし、成功の裏には反省すべき点も数多くあり、また、いくら「世界最難の山」といわれるK2に登り

得たとはいえず、実力が格段に向上するといわけでもなく、更なる精進が必要であることはいうまでもありません。

私たちの求める登山の本質が、未知や困難への挑戦であるのなら、自分たちの足元を冷静に見定めつつも、次の新たな一歩を踏み出す必要があります。

登山界の流行や、最先端のレベルを盲目的に追従するというのではなく、自分たちの山登りに真摯に取り組む、心から満足できるよう努力することが重要だと考えます。

今回のカンチェンジュンガ登山は、バリエーションルートの北面より高所ポーターを使わずに頂上を目指します。K2での貴重な経験をいかし、より一歩先へ推し進めた計画です。

相当の困難が予想されますが、参加メンバー一丸となり、全力で取り組んでいきたいと思っております。

以上の趣旨にご賛同いただき、皆様のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

⑦ 山岳救助・世界最新の技術と方法
⑧ 旅行医学と高所環境
⑨ 低酸素と低温をめぐる諸問題
* 低酸素・低体温と循環
* 呼吸の調節と低酸素

* 低酸素・低体温と脳
* 低体温症・寒冷による障害
* 高所での公衆衛生学的諸問題
* 小児と高所環境
⑩ 一般演説

第三回全国大学山岳部監督会議 頑張れ！ 大学山岳部

平成九年十一月十五日、十四時三十分から法政大学市ヶ谷キャンパスにおいて、日本山岳会・学生部指導委員会の世話で、第三回全国大学山岳部監督会議が開かれた。参加校は関東甲信越のほか、西は武庫川女子大、仏教大学、関西大学、北は東北学院大学、また韓国からは特別参加として、韓国大学山岳連盟、延世大学、成均館大学、東国大学が顔をそろえた。

黒川恵委員の軽妙な司会のもと、九十名の参加者を前に竹内哲夫副会



韓国大学山岳連盟の李会長と庚氏 右は神崎監事

長が挨拶。ゲストスピーカーとして「山と溪谷」編集長・神長幹雄会員とJ.E.C.C.所属の大蔵喜福会員の基調講演へと会は進行していった。

神長会員は中高年登山ブームと大学山岳部の衰退現象は表裏一体の関係という観点から、独自のデータに基づき話を進め、大学山岳部が勢いを取り戻すための方策を語った。

八〇年と八八年の二度「山と溪谷」誌では大学山岳部の衰退についての特集を組んだが、今もほとんど事情は変わっていない。もう二十年近く続いているのだから、賢い対策がそろそろ出てきていいのではないか。

体育会系でないアウトドア関連のサークルが盛況なことは、これまでの山岳部運営の方向転換を真剣に考えろということ。困難と危険がつきまとう山に立ち向かうのだという生きがいと達成感を学生たちに教え、主体性に目覚める若者を育てるのが急務。そのためには監督、コーチ、OBも山に登り、自ら山行の意義を体で示すことが求められているのではないかと結んだ。

大蔵会員は大学山岳部は暗い、汚い、かっこ悪い(三K)という歯に衣を着せぬ独特の大蔵節で話を進めた。面白くない魅力のないクラブに学生は足を向けない。かっこよさを取り戻すためにはOBの考え方を

えねばならない。

失敗の数が多くなければ山登りは上達しないのだから、能力以上のところにもドンドン行かせて力をつける。そして、危険に対処する感性を磨かせる。易しいことをやっていても、山へ行く以上、事故は起きる時には起きる。監督、コーチも進んで山に行き、身をもって山の怖さ、喜びを教えるべきだ。全国平均年間三十〜四十日という山行日数では、山登りに必要な技術やカンを習得できるわけがない。これまでの上から押さえるというやり方では、目覚めも望めないし、若い人にとっては面白くない。登山は究極的には個人のもののなに、能力が低いとどうしても組織に頼ってしまう。したがって開眼できないし、組織もどんどん弱体化していく。

マッキンリーには八年間で延べ五十人の若者(うち現役学生の参加は二十九名)と頂上に立った。個人のレベルを上げて個人が面白がる山岳部にしていくべきだ。海外登山はK2に見られるような横のつながりの隊があってもよいと思う、と語った。ついで韓国大学山岳連盟から来日の挨拶と連盟の現状報告。明治大学のインド・ガングスタン、中央大学のチベット・タンラボとチョムカンリ、JAC学生部のマッキンリーの

海外合宿および登山の報告があった。

早稲田大学山岳部の野沢誠司監督からは、他大学との個人山行の対処と山岳部同志の連合についての提議があり、各大学山岳部のアンケート集計データの発表、そして、熱気あふれる自由討論へと進んでいった。

最後に、担当した学生部指導委員会・宮崎紘一理事がお礼の言葉で会を締めくくり、賑やかな宴へと移った。暗闇の森に一筋の光が差し込んだような有意義な集いと思えた。

(会報担当・村井 葵)

追悼

大屋梯二さんを偲んで



吉永英明

年の瀬も押し迫った十二月二十五日、総務担当常務理事の大屋梯二さんが逝去された。

大屋さんとはJACの役員に名を連ねた平成七年度の通常総会で初めてお会いした。お互いに初めてJACの会務に携わることになったので

ある。総会後数日して、二人だけの打ち合わせをルームで行い、帰路市ヶ谷駅前で飲んだ折、出身地の長野県麻績のこと、大学山岳部新人の頃のことなどを楽しく伺った。山想会(法政大学山岳部OB会)の方からは、若い頃は大変怖い人で、後輩たちは話してもできなかったというようなことも聞いていたが、確かに寡黙な人であった。秘かに大屋さんが残された昭和二十九年十二月の明神岳S状赤ルンゼ側壁より北穂高へのアタックメンバーとしての記録、昭和三十年十二月の前穂高北尾根から槍ヶ岳へのリーダーとしての記録、そして、一九六八年(昭和四十三年)のヒンドウラジ(ブニゾム山群)への隊長としての遠征記録などの足跡をたどり、なるほどと思った。

しかし、私にとっては大変温厚で、幅の広い考えの人であった。決して怒らず「JACはクラブなのだから」と言って、何事も大勢の赴くところだまどめという手法で会務を進め、一部の強硬意見には動じない姿勢が印象的であった。だからもし自分の息子が山登りをするなら、こういう人の育った部で、と思った。人評議員会では、理事が意見を開陳することは許されないのだが、あるとき、お互い実務担当者という立場で迂闊にも物を言ってしまったため、

評議員各位から叱責された。二人で一杯やりながら、自分たちは一体何をやっているのだろうと鬱憤を晴らしたこともあった。

短か過ぎる二年半であったが、ずっと以前から知己を得ていたような思いが強い。

大屋さんは平成八年に手術をされ、体調を崩されていた昨年夏、総務委員会の有志の方々と北海道へ山登りに出かけられると聞き、無理をして悪くならない方がいいがと私たちは大反対した。大屋さんの強い希望とのことだったので見守ることにしたのだが、今にして思えば、長年勤務され思い出の多い北海道の地に暇乞いをするのが目的だったような気がしてならない。後日、奥様から大変楽しかったようで喜んでおられたと聞いた。

去る十二月八日、年次晩餐会の報告を兼ねて、村木前会長、村井前常任評議員と入院先に伺った。今日は調子がいいからとベッドに座って談笑されたが、その折も、会務で気掛かりなこととして二点ほどご指示を受けた。最後まで会務のことが頭から離れられなかったような気がする。任期途中で大変残念な思いをされたことと思う。心からご冥福をお祈りしたい。享年六十四歳。

高岳院實道梯彰居士 合掌。

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

宮崎支部

三秀台に響いたアベマリア ―第十三回宮崎ウエストン祭 尖山・祖母山登山―

■神々の故郷を訪ねる

明治二十三年(一八九〇年)十一月六日、イギリスの宣教師ウォルター・ウエストン氏は祖母山に登り、翌二十四年に長野・富山の山々に登山、世界に日本アルプスを紹介した登山の先駆者で、日本山岳会の名誉会員でもある。この偉大な先駆者の偉業を称え顕彰する行事が、宮崎支部発足の記念行事として十三年前から開催されて九州地区に定着し、全国に情報を発信するまでに発展してきた。神々の郷五ヶ所高原・三秀台

に建つウエストン碑に花束を捧げ、鐘を打ち鳴らしつつ新たな感動を得ながら遺徳を偲ぶ。

■観音滝・三十三観音と尖山

会員、会友二十二名は、昨年十一月二日九時、JAアズムを六台の車両に分乗して出発。国道一〇・三三七号を経由して西郷村田代へ。尖山は秀麗な山容を誇り、神々が降臨したと思われるたずまいである。

登山口には、百三十年代前、西郷村上野原にあった「金鐘庵」(慶応三年廃寺)の住職石苗とその弟子石叟が建立したという三十三観音(現存三十体で三体は不明)が舟型光背に浮き彫りにされ残されている。

観音滝は、尖山と日隠山の山裾の落差約三〇メートルの滝で、幽谷と荘厳さを醸し出している。

一行は、観音滝の谷間で早い昼食をとり、観音滝の右岸の傾斜地に登り、揚柳観音像の上から登山道のないう直登を開始する。二十分もすると息が徐々に乱れ始め、四十分で稜線



トランペットが山並みに響く

に出る。コメツツジ、ミヤマシキミの赤い実が疲れを癒してくれる。一時間四十五分で山頂に立つ。

展望はゼロ。十五分の小憩後下山開始。どうしたとか、往路の判定を誤り、溪に到着してみると登山開始地点から二〇〇メートル上流であった。しかし、溪の美しさは格別で、炭焼き窯の跡やナツエビネ・紅葉・岩清水に出会うことができた。

行動予定の時間を二時間オーバーしており、進路を変更して北郷村宇納間から林道を経由して六峰街道を横断し、日之影町、高千穂町を経てメルヘンの世界五ヶ所高原に十八時到着。ウエストン前夜祭の開始直前であった。

■人生感動・人生青春

祖母嶽神社宮司の登山安全祈願に続き、神楽と子供神楽が奉納された。小学四・五・六年生による真剣な舞いに観衆の拍手が沸く。キャンプファイヤーの点火者には地元若いのカップルが選ばれ、巨大な薪の檜に点火された。カップ酒が振る舞われ、竹の油が染み込んだ青竹のコップに甘い二五度の焼酎が注がれる。熱くおいしい。たき火にあたって暖をとりながらヤマメの塩焼きを頬張る。やがて五ヶ所小学校全校生徒二十七人の合唱が開始される。一年生も六年生と同様に口を大きく開け、腹

の底から精一杯歌う。寒風をついて歌は流れ、観衆のだれもが微動だにせず少年たちの歌声に耳を傾けている。アンコールの叫びと手拍子にこたえて、少年たちは校歌を斉唱。感動し熱いものが体を駆け巡る。素晴らしい。「人生感動、人生青春」を想起させてくれるひとときであった。

■トランペット演奏に沸く

三日、五ヶ所高原の朝は霧に包まれていた。朝食の味噌汁は精気を与えてくれる。公民館清掃、祖母嶽神社参拝を済ませ、慌ただしくウエストン祭会場の三秀台に急ぐ。

高千穂町長の歓迎の挨拶に続き、支部長のウエストン牧師に捧げる詩の朗読、高千穂神社・後藤宮司の「山について」のミニ講話。次は会友・上野重津砂さんのトランペット・ソロ。「アベマリア」「もみじ」は選曲もさることながら、ドイツ留学によって磨きかけた技の、体の底から吹奏される音色は、素人の私にさえ強烈な感動を呼ぶものであった。

十一時、北谷口から登山開始。妻は初参加でかなり緊張している。心肺機能が徐々に高まりはじめる。五合目・千間平で東京からの参加者十九名とともに昼食をとり、三十分の休憩。会話が弾む中で元氣を取り戻した妻は山頂を目指すという。ここから一行の後尾につき、二人三脚で

三県境・国観峠を経て、八・九合目の急登を、先の寒波で薄化粧の残雪に勇気づけられながら苦闘の道を克服して、十四時山頂に立つ。

山頂の感動は、そこまでに至る道程の中で、自然の造形との出会い、同行者などによって若干の差異があるにしても感激は同じだ。妻の満足そうな笑顔を見ていると、自分が豊かになる。抜群の眺望からくる感動もそこそこに、風穴コースの下山道に入る。直滑降のコースに悪戦苦闘を繰り返す妻。途中の景色をいかほど堪能したであろうか。霜枯れたナラ・トガなどの落ち葉を踏みしめて登山口に十六時到着。

全員踏破。疲労は同じだが、違うのは年齢からくる差だけか。ここからドライバー担当会員の苦労は続く。四時間の安全運転によって二十一時帰着。参加者の協力によって登山の自分史に新たなページを書き加えることができた。会員・会友のみなさんのほのぼのとした気配りに感謝したい。

(井野元繁)

山梨支部

支部設立五十周年記念集会

山梨支部は、昭和二十四年の第四回国体会場が富士山に決定したこと

海外の山

ヒマラヤ情報と能海寛

江本嘉伸

そのカパディア氏と昼食をとともにした時、当然ヒマラヤ情報について話になった。「今、一番の問題は、日本の登山隊についての英語情報がほとんどないことです」と、彼は強調した。数多くの隊がヒマラヤに出ているのに、日本隊に限っては、経過も結果もわずかしが入ってこないという。

そのことは、最近日本の登山界でも話題になっている、改善への努力は少しずつなされるであろう、というふうに言ってみたが、外国に比較的知られていた「岩と雪」も休刊したほどこから、実際はどうか自信はない。日本山岳会でも一部の会員がホームページ作成に努力されているが、英語情報の徹底となれば、もっと横断的な取り組みが必要だろう。

唐突なことだが、英語うんぬんを考えるうち、能海寛(のうみ・ゆたか)のことを思い出した。仏教の原典を求めてチベット潜入を志し、ちょうど百年前の一八九八年十一月、神戸を出航した島根県の学僧。ダルツェンド(現在の四川省康定)、青海からの入蔵はならず、日本を出て二年五ヶ月たった一九〇一年四月、雲南省の大理で「身命を惜しまず」の一文を書いて奥地に入

ったまま消息を絶った。

一般にはまだ十分には認識されていない歴史のひとコマだが、同じ時代、チベットを目指して行動を起こした日本人は、実は四人いる。能海寛のほか、河口慧海、寺本婉雅、成田安輝である。慧海の成功とその「チベット旅行記」がおもしろかったために、人々は「帰ってこなかった学僧」のことは忘れてしまったが、その文化に憧れ、もっともひたむきにチベットに向きあったのは、能海であった。

その能海は、一世紀前、国際語としての英語の必要性を論じ、英文ノートに綴った。この会報でもウェストンから英語を学んだ学生として紹介された(九七年二月)が「We find that English is a most common for all men on the whole world」という書き出しで、外界に自分たちの文化や主張を伝えることの重要性を説いたのだった。

情報を享受することだけでなく、発信することも大切だ。明治のチベットへの旅人が提唱した時からもう一世紀。私たちは、山の世界でそれを始めたら、と思う。

なお、「能海寛遺稿」(一九一七年発行)が二月下旬、五月書房から復刻出版されることを、お伝えしておく。



支部創立50周年を祝う

を契機に、日本山岳会の第八番目の支部として、昭和二十三年十一月に発足。去る十一月十五、十六の両日、五十周年の記念集会を催した。

ぶどうの町勝沼町の町営「ぶどうの丘」で行われた記念集会には、本部から斎藤会長、竹内副会長、隣接信濃の田中支部長、越後の田辺事務局長、山梨岳連の高室会長、支部員五十余名が列席。物故会員の黙禱、古屋支部長の挨拶、来賓の斎藤会長、田中支部長の祝辞に続き、「往時を語る」コーナーでは、高室岳連会長が本県の当時の著名な山岳会の活動状況を、山村委員が支部発足前後の動静と設立にまつわる裏話を語った。

興味深かったのは、県内の当時の山岳会がレベルの高い登山活動を行っていたこと、また国体が富士山に決まり、設立機運が高まったが、個人会員だけでは設立要項を満たせず、県内山岳団体に加入を求めてやっとクリアし、山梨岳連と二枚看板でスタートした、との懐古談であった。

続く「最近の支部活動」では深沢委員が、資料「南アの将来像」を中心に五回を重ねたフォーラムの報告と、山梨県知事に対して山岳行政に関する提言を行ったことを併せて報告した。さらに中高年、未組織登山者に対し、支部としてどうかかわっていくかの議論が必要、との認識を示した。

二部の記念講演は「氷河の山を歩く」の演題で「岳人」編集長の永田秀樹氏にお願いした。ペルーのインカトレールなど、軽妙な語りとスライドで歩いた氷河の印象や山を紹介。氏は本県の出身、参加者に同窓生が多いこともあって、大好評であった。

集会後の懇親会は、竹内副会長の挨拶、金子信濃副支部長の乾杯の音頭で十七時半開宴。近隣支部と会員の差し入れに加え、古屋支部長手作りのワインで会場は盛り上がり、文字通りの懇親と交流は二十二時過ぎまでの長丁場となった。

翌十六日の記念登山は二十五名が

大菩薩連嶺の大蔵高丸へ。雨こそ降らなかったが、霧の去来するのどかな稜線で、大蔵高丸の山名の由来を山村委員から聞きながら、一升瓶のワインを空にして、約二時間のハイキングを楽しみ、五十周年の節目の行事を終了した。(坂本 桂)

福岡支部

四十周年記念中国雲南の旅

—麗江納西族自治州
迪慶チベット族自治州—

福岡支部は四十周年を記念し、昨秋十一月六日より十三日間で、中国雲南省の梅里雪山(六七四〇メートル)と玉龍雪山(五五九六メートル)山麓を訪れ、トレッキングを楽しんだ。参加者は松本支部長、深田副支部長、福岡支部より六名、他支部から参加もあり、総勢十一名となった。

近年雲南省奥地も観光誘致に積極的で、一昔前からは想像できないほど各施設は充実していた。省都の昆明より陸路、大理を経て二日間で玉龍雪山を望む麗江へ。直下の白水から纳西族の伝説の高原・雲杉坪までチェアリフトが伸びており、氷河の山々を眺めながら、まさにスイス・アルプスの感覚でハイキングを楽しんだ。一帯は黄シヤクナゲの群生

地で開花期は見事だという。

さらに雲南・チベット公路(茶馬古道)を北上して中甸へ。哈巴雪山や白芒雪山の裾野を通り、四三〇〇メートルの雪の峠を越えて、梅里雪山山麓の徳欽へ。英国人キングドン・ウォードがその著「青いケシの国」で滞在したこの地は、瀾滄江(メコン河)を挟んで梅里雪山山群の対岸に位置する。徳欽の北約一〇キロの飛来寺あたりからは、最高峰のカワグボ(六七四〇メートル)、第二峰の面茨母(六〇五四メートル)、奇峰の五冠神山(五四七〇メートル)などが望めるが、あいにく、到着日よりの季節外れの降雪のため、裾野

コンパスグラス HB-3

広視野10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目標がそのまま正しい磁気方位です。

重量78g.

つや消し黒 ￥17,000 送料 ￥600

黄褐色メタリック ￥18,000 消費税別

カタログ代無料、電話、FAX、来書でどうぞ

〒177 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号

TEL 03-3928-5411 FAX 03-3928-5411

株式会社 石神井計器製作所



タルチョーはためく徳欽入り口で

しか見ることはできなかった。

京都大学による一九九〇～九一年の日中合同隊の十七名もの命を奪った、不幸な雪崩による惨事は記憶に新しい。飛来寺の先一キロの、梅里雪山を望むところに慰霊石碑があり「大地あり、美しき峰ありて、気高き人がいて」と刻まれていた。根雪に変わった風雪の中、皆で合掌し酒とタバコを供えた。

二日間滞在するが、天候はよくならない兆しもなく、今度はいかにして脱出するかを考えねばならなくなった。徳欽県旅遊局の協力で、京都大学が寄贈したパジェロを確保し、予定を一日早めて厚雪の白芒雪山垭口(峠・四三〇〇メートル)を越えることに何とか成功。中甸ではCITS(昆明国際旅行社)中甸分社の所長より、タカー(チベットの白布)を首に贈

られ、無事脱出を祝福していただいた。

緊張が解けた帰路は天候にも恵まれ、無名の名峰・奇峰を堪能し、標高は低いが未踏峰が無尽蔵に覆う至福の世界で、連夜の祝杯を重ねながら楽しく過ごす。この雲南省最北部辺境地帯は金沙江(長江)、瀾滄江、怒河(サルウィン河)の全く違う流域に河口を持つ大河が、わずか六〇～八〇キロの間を並走して南流するため、三江地域とも呼ばれている。この奇異な地形のため多くの探検家の羨望の的となってきた。二週間という限られた期間では、その一端を垣間見たに過ぎないが、全体を総括的に把握することはできた。この魅力ある地を再度じっくり訪れるために。

(渡部秀樹)

北海道支部

第一回作品展開催

北海道支部ではかねてから計画中の、会員有志による絵画などの作品展を開催した。作品のジャンルは、「壁に展示できるものならば種類を問わず」として募集したところ、油彩・水彩・クレパス画・切り画・版画(エッチング)・写真・彫金と多彩な作品が十八点集まった。全道展

会員もいれば、全くの素人も混じっている。展示場所は、戦前から山仲間がいつも集まる『つる』で、会期は一か月。現在の店主大内会員も、学生時代から通いつめ、とうとうここに就職してしまったとか?

北海道支部ではもう数年前から、毎月第三水曜日の夜、三水(山酔)会と称してここに集まり、楽しく飲み、かつ談笑する例会を開いてきた。そこで出たのがこの作品展の話である。店主がJAC会員であるのをいいことにして無理を頼み、とうとう開催にこぎつけた。

九七年七月十六日午後四時、開店前の『つる』に作品を持ち寄って展示の準備をはじめ。毎年展覧会を開いている人もいて、一時間ほどで終了。大は一メートル×一・五メートルの彫金「マッキンリー」、小は葉書大のエッチング「旭岳とみずばしゅう」までの作品を壁に掛けると、普段とはひと味違って、店主もまんざらではない様子。画題はヒマラヤからアルプス、アラスカ、北海道の山まで、バラエティーに富んでいる。五時、すでに開店の時刻である。早速我々がお客に早変わりして山酔会が始まった。やがて一般客も入りだし、「ちょっと雰囲気が変わったな」と壁をじっくり見回す人もいる。そんな様子を横目で眺めながら、こ

ちらはメートルの上がり早い。いつもの時刻に近づく、三々五々会員が集まってきて、遠く日高の新冠からきた常連もいた。例のごとお開きは午前様だったとか。

『つる』の一軒おいた隣は、女子マナスル登頂のM会員がやっているロシア料理店『アンナ』である。正月の山酔会はこの店で、お酒だけでなく、夕食をとりながらの新年会、ということに今年からなった。

山登りは言うまでもなくただ休けを動かす普通のスポーツとは異なる。衣食住すべてを包含した総合的な営みだから、当然科学・絵画・彫刻・音楽・文学など、我々を取り巻く自然を対象としたすべての活動と共にある。その意味でこのたびの支部主催の作品展は少し遅かったのかもしれないが、山行と並んで、ますます発展していくことを期待したい。

実は一九九九年は北海道支部の設立三十周年である。その記念に北海道の山を中心とした、文芸誌のようなものを出版したい、と考えている。まだ構想の段階であるが、これが日の目を見れば、支部の文化活動にもさらに励みが出てくるだろう。

札幌にお出での会員は、ちょっと誰かに声をお掛けの上『つる』にお立ちよりの程を。支部会員が多分お待ちしていると思う。(野田四郎)

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚でお願いします)



イラスト 野田四郎

大正二年の上高地ごぼれ話

古市 進

ウォルター・ウエストンの『日本アルプス登攀日記』(東洋文庫、三井嘉雄・訳)によれば、一九一三年

(大正二年)八月六日の項に、上高地の宿に着いて、満員の同宿者、とくに何人かの遅くまで酒を飲んで騒ぐ学生たちに悩まされる件があって、「この日、第一高等学校旅行部の大木操たちも、ウエストンから注意を受けた。大木は翌日、河童橋でウエストンの貴重な写真を撮影した」との訳注が付されている。この時に撮影された写真というのがよく知られた上高地でのウエストン夫妻の写真(日本山岳会所蔵)に当たっている。ところでこの時、宿ではしゃぎ過ぎてウエストンから注意された人た

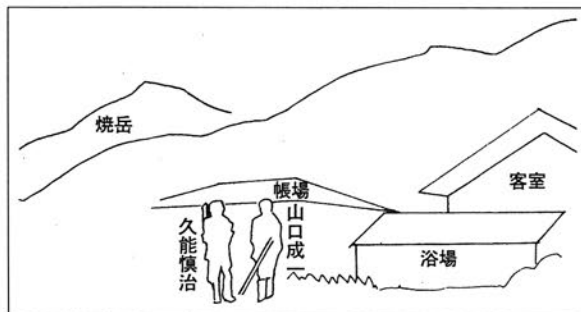
ちのなかに、当時中学生であった辻莊一(立教大学名誉教授、戦前の立教大学山岳部長であり、日本山岳会名誉会員でもあった)が含まれていて、当時の思い出話を耳にした立教関係者は少なくない。

ここに紹介するのは辻教授の所蔵されていた、当時の出来事に関わりのある大木操氏撮影の二葉の写真であるが、一つは大正二年八月六日の正午に前穂高岳の頂上で撮影された辻教授も入っている集合写真。今一つは二日後の八月八日に撮影された当時の清水屋の写真である。辻教授の蔵書並びに専門である音楽と山関係の諸資料は、同教授の没後、立教大学に寄贈されて「辻莊一文庫」として同大学図書館の新座保存書庫に保管されているが、これらの写真もその関連資料中に含まれていたものである。

これらの写真が辻教授の手許に渡った経過としては、写真が撮影された大正二年から六十四年の歳月を経た昭和五十二年になって、大木氏と辻教授が再会を果たし、その会話が糸口となって辻教授の許に送られてきたとのことである。各写真に付した説明は大木氏が送り状に書かれた内容を拝借したものであり、不明と書かれた映像は結局個人名を特定できなかったとのことである(写真説明中の敬称は略させていただいた)。



前列左から、不明、不明、山口成一(一高)、松本唯一(一高)、神田鎮次郎、辻莊一(神戸二中)、後列左から、鹿子木員信、茨木猪之吉、木内政蔵(一高)、作太郎(案内者)、不明、山崎武二(神戸二中) 前穂頂上で



楼蘭探訪 大谷探検隊以来八十七年

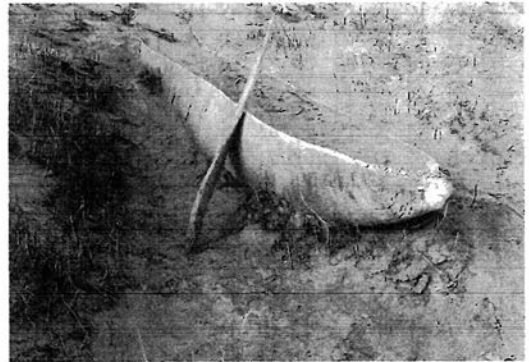
一力英夫

在京の大学山岳部OBなど、十名で編成した「楼蘭探訪」(企画・朝日旅行会、期日・十月八日～二十日、隊長・増田昌司)は、トルファンからランドクルーザー(トヨタ四輪駆動車)と徒歩の七泊八日の幕営で、タリム盆地をほぼ東経九〇度に沿って南下する楼蘭ルート(往復約八五〇キロ)の踏破に成功した。

この計画は一九一〇年(明治四十三年)に第三次大谷探検隊の橋端超師が、一か月間の旅程を七名の夫と十一頭のラクダのキャラバン隊で初踏破以来、八十七年ぶりのこのルートへのトライである。

ご存知のように楼蘭王国遺跡は一九〇〇年(明治三十三年)、スウェーデンのスウェン・ヘーデンが発見以来、英国のスタインや大谷隊などが発掘調査を行い、世界的な話題となった。その後は第二次大戦、中国革命、原爆実験などで入域は不可能だったが、一九八八年(昭和六十二年)の朝日新聞社主催の企画を契機に、許可制ながら「探訪時代」が訪れた。

このたび、我々は最近まで未公開



ヘーデン隊が残した(1934年)と思われる丸木舟

になっていたトルファンからの南下ルート入域許可を新疆ウイグル自治区文物管理局に申請し、十名限定の入域が許可された。

中国側はウルムチの旅行社のガイド六名、運転手六名、文物管理局員一名、トラック一台(食料、燃料、飲料水、露営具を搭載)、ランドクルーザー五台の陣営となった。

南下ルートはトルファン盆地からロプ・ノール旧湖までは、クルク・タグ山脈を主脈とする標高二五〇〇メートル前後の八つの支脈の横断と、ゴビ状の砂漠やヤルダン(風化土堆群)の突破を繰り返す難コースである。楼蘭に近づくにつれて、凹凸溝の激しいヤルダン地帯は車が入

れず、最後の約六キロは徒歩で楼蘭遺跡を目指した。

この間、流砂が雪渓状に谷間を埋めるクリク・タグの山容、広大な岩塩の露出層、絶滅寸前の野生ラクダなどの珍しい風物や、橋隊が発見した漢代の古城跡の再発見、ヘーデンが一九三四年(昭和九年)に使用したものと同型の丸木舟の発見、さらに楼蘭遺跡での二泊で遺跡内の仏塔群のほとんどの視察ができたことなどは、このコースならではの収穫であろう。

隊の長老、南雲和雄隊員(農大OB、七十歳)はヘーデン以来の楼蘭探訪者の最年長となったが、紅一点の鳴原洋子隊員(早大OG)はこのルートからの女性第一号である。

●付記

ロプ・ノール湖の水の変動(推定)AD三三〇年前後に枯渇、一九二一年(大正十年)頃水が戻り、一九四四年(昭和十九年)頃再び枯渇、現在乾燥湖(小規模な湧水を今回発見)

芦生の森を歩く 東海支部と京都支部の交歓

橋村一豊

芦生(あしゅう)の森は京都府の北に位置し、福井県と滋賀県に境を

接している。由良川流域を占める五一〇〇ヘクタールのうち、四二〇〇ヘクタールは、九九年契約で地元から京大農学部へ演習林として貸しつけられた。演習林の半分は手つかずの原生林として残っている。日本海気象と太平洋気象の境目にあり、西日本の暖温帯から東日本の冷温帯への移行地帯のため、動植物が多種類な野生の宝庫となっている。

二〇二〇年の契約切れを狙って、関西電力による若狭原発の揚水ダムができると、森は全滅に近いダメージを受ける。これを阻止し、また今後の商、産業開発の禍根を断つため、森をユネスコの世界遺産に登録しようという運動が、芦生の住民を中心に京都支部やシンパの著名人らにより進められている。

十月十八日、鈴鹿の椿神社で行われた日本山岳会自然保護全国集会で、京都支部からこの報告を聞いた私たち東海支部では、自然保護委員や役員を中心に、有志を募って芦生の森を訪れることに話がまとまった。現地案内を椿神社にきていた秋野子弦さん、高松武夫さんをお願いしたところ快諾を得た。

その後ジャーナリストにも声がけをし、中日新聞の石原俊洋さん(会員)、岳人編集長の永田秀樹さん(会員)、山と溪谷の神谷有二さんも参



原生林の桃源郷で 撮影・猿山昌夫

加され、これを含む参加者は総勢二十四名となった。

■美山町へ

芦生の森がある美山町は町村合併の結果、広い面積にわたっている。若狭の海産物を京へ運ぶ昔の「鯖街道」が何本もこの町（といっても大半は山林だが）を通っている。

十一月二十三日朝、名神道養老SAに集結した私たちの車六台は、京都東ICから丸太町通りを経て周山街道（国道一六二）へ入った。高雄の紅葉・北山杉の美林などの景観を楽しみつつ一路北上、JR周山バス

停で東京からきたジャーナリストをピックアップ。今日の座学の会場であり、宿でもある森茂明会員の経営する民宿「もりしげ」には昼過ぎに到着した。昔ながらの茅葺き屋根で、三十人くらい入れる居間には巨大な囲炉裏が切っただけである。

■森人の話を聴く

午後は芦生原生林や動植物の話、それを取り巻く社会的、あるいは地域の状況、経済的背景、世界遺産登録に至るものの考え方、エコ・ミュージアムの構想、美山町の山人たちの生活等々多岐にわたるお話が、高松さん、森さん、井栗さんらによって語られた。

■森を歩く

明けて二十四日、朝は霧が濃かったが次第に青空が広がる好天となった。民宿のある内久保から予約したマイクロバスに乗って森へ向かう。途中、南、北、中、江和、田歌などの在所を通って行くが、日本で一番残存率が高いという茅葺き屋根の家々の庭や石垣に、たわなに実った柿が美しい点景となり、日本農村の原風景を見る思いがした。

バスは演習林事務所やナメコ生産組合のある須後で一休みして、由良川源流上谷の長治谷作業小屋へ向かう。須後から乗り込んだ森の生き字引、井栗さんの適切な解説で、森

の成り立ちや植生への理解が進んでいく。

民宿から林道をたっぶり一時間半かかって長治谷小屋に着く。森の大きさを思い知った。芦生の谷々は入り口が険しく、上流へ行くと流れの緩い桃源郷の構造になっているという。小屋から枕谷沿いの道を歩いて、地蔵峠、三国峠に登り、遠望する。

小屋に引き返し、広場で弁当を食べた。ついで野田畑湿原を通って上谷をつめ、杉尾峠に出る。この道で井栗さんの解説を聴きながら、桂、板、沢ぐるみなどの巨木の多い原生林の豊かな植生をじっくり観察することができた。原生する芦生杉は、この地の多雪（三メートルを越すという）を示して、みな根曲りになっている。紅葉も終期に入っていたため、動物、昆虫は見なかったが、沢には何度か魚影を見た。蛇はハブを除いて日本にいる全種類がこの森にいますという話だ。

杉尾峠に迎えにきたバスに乗って、車を置いた民宿に戻った時は午後もう遅くなっていた。森さんの奥さんや娘さんの作ってくれたトロロ蕎麦のうまさは、蕎麦嫌いの箕浦さんがお代わりをしたほどであった。

全行程を同行案内してくださった美山町在住の京都支部員・秋野、森、高松さん、そして森人井栗さん（同

氏は最近会員になった）には深く感謝します。

■これから

私たちは今回の山行だけで芦生の森を知悉できたとは思っていない。春夏秋冬、ルートを変え、少なくともあと四回は訪れてみたい、この奥深山域の全貌は掴み切れないという気がする。四季を通しての山行の過程で、自然保護の考え方を深め、京都の盟友たちの運動に対して私たちができる手助けは何かを見出だしてゆき、さらに、私たちのハイマート・ゲビルゲである東海地方の山々では何をなすべきかを話し合っていきたいと思う。

ネパールへようこそ

1998年はネパール観光年です。

【ネパール観光年スペシャル企画】

コールテンウィーク●4/26日～5/4(月・休) 9日間

ネパール・カトマンズ行特別運行便(名古屋発着)

ヒマラヤ越えフライトが魅力。エベレスト、カンチ、マカルー展望

●トレッキング中心の全6コース ●好評受付中



運輸大臣登録旅行業第490号 / 日本旅行業協会正会員

アルパインツアーサービス株式会社

〒105-0003 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911

大阪 ☎06(444)3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557

おわりに、芦生の森の問題を理解する上で役に立つ文献を二つ挙げておきます。

『芦生原生林―ダムで村おこし』

森茂明著「淡水魚保護」一九八九

へ出稿した論文。コピーが欲しい方は森氏へ実費で依頼してください。

TEL & FAX 〇七七―一七五―一〇八六

『芦生の森から』

芦生の自然を守り生かす会編 かもがわ出版 千三百円

TEL・〇七五―四三二―二八六八

FAX・〇七五―四三二―二八六九

記念の年

大森久雄

この一、二年、日本山岳会の先輩にゆかりのある年が続きます。まず今年は、小島鳥水没後五十年（一九四八年十二月十三日没）で、没後四十年が、岡野金次郎（一九五八年二月十四日没）と高頭仁兵衛（本名・式、一九五八年四月六日没）。そして来年は、大島亮吉（一九九九年九月四日）と松方三郎（一九九九年八月一日）が、再来年は三田幸夫（一九〇〇年）が、それぞれ生誕百年を迎えます。

そうした年に何の意味があるか、それにはかにもいる、という向きも

ありましようが、小島鳥水と岡野金次郎が一九〇二年（明治三十五年）に槍ヶ岳に登り、その後、岡野金次郎がまったく偶然にウエストンの著書『日本アルプスの登山と探検』を見かけ、それが機縁となってウエストンとの交流が始まり、日本山岳会の誕生につながったエピソードはよく知られています。また高頭仁兵衛は『日本山嶽志』を著し、日本山岳会の発足にあたって財政面から大きな支援をしたことも忘れることはできません。

松方三郎は「山登りは先人の肩ののって登るものだ」と書いています。こうした機会に私たちの偉大な先輩の業績をしのび、いまの、そしてこれから山登りを豊かなものにしてゆきたいものです。いずれ、何らかの催しを企画したいと考えています。これら先人についてお知りになりたい事柄があれば、図書委員会宛、ご一報ください。（図書委員）

インターネットの利用あれこれ

多田真弘

日本山岳会もインターネットのホームページ（以下HP）を開設しました。開設目的にJACの情報窓口

となることあげられていますが、運用開始後、一か月で約五百人からアクセスがありました。また多くの反響があり、海外山岳会などからHPのリンク依頼やエールが数多く寄せられました。

会員にはすでに多くのインターネットの利用者もいらっしゃいますが、利用例をいくつかご紹介したいと思います。なお、パソコンやインターネットに関する入門的な技術事項は参考書類をお読みいただければ幸いです。

■HPのリンクとは

HPはいわば電子壁新聞です。この壁新聞と関係のあるところへ、情報を読みに行くのに便利のように、自分のHPに関係のあるHPのリンクを掲載し、その名前を指定するだけで芋蔓式に欲しい情報が読み出せるようにすることを、HPのリンクといいます。JACのHPに内外の山岳会やJACと関連の深い団体などがリンク先にリストされています。昨年の年次晩餐会のように深い交流を持つカナダ山岳会をはじめ、スコットランドや日本ネパール協会、ヒマラヤ探検協会など多くの団体からも新たな交流を持ちたいとのエールがJACのHP宛に寄せられています。

日本の山岳界の持つ遠征記録など

は世界的にもその内容公開が期待されており、今後のJACの資料整備やデータバンク化の使命の重要さが、改めて感じられる状況です。

海外山岳会では、英国、ニュージーランド、アメリカ、カナダ、イタリア、スイス、スコットランドの各国山岳会とリンク済みで、さらに順次追加する予定です。

■ネットサーフィンで天気予報

ネットサーフィンという言葉を見聞された方も多いでしょう。これはHPのリンク先を次々と移り、情報を読み取ることで、JACのHPから出かけてみましょう。山行で山岳展望を楽しまれる方は多いでしょうが、富士山の眺め具合とお天気をインターネットで以下のように調べる例をあげました。

JACのHPリンク先の「山の展望と地図のフォーラムFYAMAP」と接続し、そのHPの「特選リンク先」を見ます。するとさらに「富士山」があり、いくつかの富士山の眺め具合や地域情報、富士急行の交通情報などがあります。必要な情報を見た後に、同じように「お天気と気象」リストに移ってみましょう。

一例としてWNI Gybor Weather Worldを選ぶと、気象衛星ヒマワリ画像、地域天気予報などが公開されています。便利なのはオートキャ

ンブ場、ゴルフ場など、目的とする山の近くの場所の天気予報を見ると、翌日一杯までの三時間ごとの天気予報があります。私の経験からはかなりの中率が高く、出かける際の参考になりますし、逆にお天気のよいところを選んで山の行き先を選ぶことができます。もし、お天気が悪ければ、「エベレストライブ」今日のエベレストの見え具合をインターネットで楽しむことも一興です。

また、本会員である橋本首相の山岳写真を首相官邸のHP (URL <http://kantei.go.jp/>) でご覧になっ

■その他

JACのHPのリンク先の富山県警はインターネットで山岳情報の提供、そして何と登山届を受け付けています。また、リンク先ではありませんが長野県警も同様に山岳情報を提供しています。(URL <http://www.avisnet.or.jp/~police/nsangaku.html>)

なお、会員の方々から電子メールのアドレスの連絡をいただいています。さらに多くの方々の連絡をお待ちしております。左記宛ないしは葉書などで山岳会事務局気付けでご連絡をいただくようお願いします。

QFH01627@niftyserve.or.jp

(データバンク研究会)

ルーム日誌

12月	総務委員会
1日	総務委員会
2日	総務委員会 やまげらの会
4日	常務理事会 山学研
5日	総務委員会
8日	図書委員会 データバンク研究会 アルパインスキークラブ
9日	二火会 アルパインスケッチクラブ 95同期会
10日	理事会 93同期会
11日	集委員会 青年部・学生部
12日	緑爽会 フォトビデオクラブ
15日	総務委員会 図書管理委員会 94同期会
16日	自然保護委員会 アルパインスケッチクラブ
17日	フィルムビデオ委員会 三水会
18日	科学委員会 学生部
22日	山研委員会
24日	資料委員会
25日	集委員会
29日	
1月5日	年末年始休み

12月来室者 556名

図書紹介



★紹介図書は全て税別価格です

J・クラカワー・著 海津正彦・訳
『空へ』

一九九六年五月、商業登山隊のひしめくエベレストで大量遭難が発生、難波康子さんもその中の一人であったことは記憶に新しい。

本書はその登山隊の一員として登頂、無事生還した著者が記憶をたどり執筆したもので、あまりにも生々しく、世界最高峰へ登ることの厳しさ、人間の心底にある現実を直視するという意味で、圧倒される。

全米ベストセラーのトップにランクされ、今なおベストセラーを続けているというだけに、岳人であれ一般読者であれ一読に値する。

また、インド隊を救助しなかった日本隊の様子を、一章を設け紹介しているが、事実と異なり、インド・

チベット国境警察長官が「福岡隊を非難することはできない」との公式見解を表明している。(林 栄二)

一九九七年十月 文藝春秋発行
三九六ページ 千七百六十二円

山口ゆき子、横山 隆、高柳生雄、川越はじめ、岡村美邦・共著

『二等三角点の山々』

今、二等三角点は静かなブームに湧いている。日本全国九七一ある測量基準点で標石・花崗岩一辺一八センチ角九〇KGS―が南向きに埋設されている(注・規定される以前の古いものは方向が定かでない)。登山の対象になるのは半数くらいであろうといわれ、『二等三角点の山シリーズ』では三冊(一等三角点の名山一〇〇、一等三角点の名山と秘境本書)で、二百八十項としている。

本書は九年前発行の同名本の改訂版で、北海道から九州まで八十項目の山々で構成され、ほかの二冊とは重複しない。

内容は、二等三角点略図が一覧表として巻頭にあり、各項目には山名、点名・三角点の戸籍名・本点、補点、基線の区分と高度、地図名二〇万、五万、二万五千が枠内に記入されて表題となっている。本文は五名の著

者が分担踏査の上、手短にまとめた記録が概略図、写真とともにあり、末尾に交通、コースタイム、問い合わせ先が記載され、必要最低限のデータが入手できるようになっている。大変便利なガイド本である。

また「日本経緯度原点(東京麻布)」

と鹿野山、丹沢山は最初の三角を作り、二等三角測量の元になった地点である」と紹介されており、二等三角点病者にはシリーズ三冊は必携の書であろう。

一九九七年十月 新ハイキング社
発行 三一―ページ 千六百元

奥多摩山岳会・編

『奥多摩の尾根と沢』

東京近郊の奥多摩の山の尾根歩きと沢登りのガイドブック。「土地っ子山岳会員が会創立五十周年を機に踏査、魅力たっぷりの一二〇コースをランク別にガイド」というのが、この本の帯の惹句である。尾根筋は一般コースのほかに、あまり普通の登山者が入らない、つまり地形図に破線路の記入がないところも踏査記録として丹念に拾ってある。また、沢筋はみな会員の遡行記録として紹介されている。

そうした内容からいえば、奥多摩の山と谷をもう一歩進んで楽しもう

とする人に向けたガイドブックといえよう。奥多摩には随分通ったと自負する人でも「こんなところもあったのか」と教えられる新知識も少なくない。その山域の奥深さに驚くとともに、いっそうの愛着を抱くに違いない。

(横山厚夫)

一九九七年八月 東京新聞出版局
発行 二四四ページ 千五百円

百武 充・著

『上高地の谷から』

本書は三部からなっており、第一部ではタイトルの通り、上高地の自然を季節を追って紹介してある。これだけならばほかにも類書はみられるが、本書を特徴づけているのは、続く第二部「パークレンジャーの道」と第三部「国立公園の管理とパークレンジャー」の項であろう。

「パークレンジャー」とは「国立公園管理官」のことであり、国家公務員である。著者は三十年にわたり、尾瀬、阿寒、西表島などの国立公園のパークレンジャーとして活動してきた実績を持ち、本書の第二部ではその活動を綴っている。初任地の尾瀬での平野家との出会いや、厚生省から新設の環境庁への移行など興味深いエピソードも多い。自然保護に対する社会的な認識が、時代とともに

図書受入報告 (1997年12月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入
樽矢導章 (編)	峯：日本山岳会石川支部・創立50周年記念号	208pp/21cm	日本山岳会石川支部	1997	発行者寄贈
日本山岳会山梨支部 (編)	南アルプスの将来像：フォーラム報告 (1995-97年)	20pp/26cm	日本山岳会山梨支部	1997	発行者寄贈
松倉一夫	山登りのプランと準備 (ヤマケイ登山学校 No.5)	174pp/21cm	山と溪谷社	1997	出版社寄贈
木本哲	氷雪テクニク (ヤマケイ登山学校 No.19)	193pp/21cm	山と溪谷社	1997	出版社寄贈
島田靖 他	岐阜県の山 (分県登山ガイド No.20)	119pp/21cm	山と溪谷社	1997	出版社寄贈
鹿児島山岳会	鹿児島県の山 (分県登山ガイド No.45)	110pp/21cm	山と溪谷社	1997	出版社寄贈
山と溪谷社 (編)	日本のクラシックルート：74 Classics in Japan	190pp/26cm	山と溪谷社	1997	出版社寄贈
飯山健治	フリーダム：平山ユージの世界	127pp/29cm	山と溪谷社	1998	出版社寄贈
とよた時	山の神々いらすと紀行	266pp/19cm	東京新聞出版局	1997	出版社寄贈
とよた時	山の神々いらすと紀行	266pp/19cm	東京新聞出版局	1997	著者寄贈
串田孫一 他 (共編)	富士山・第2巻 (日本の名山 第14巻)	250pp/20cm	博品社	1997	出版社寄贈
村上兵衛	黒部川：その自然と人と	525pp/24cm	関西電力	1989	発行者寄贈
朝日カルチャー 山村教室有志 (編)	山雷の古稀	99pp/19cm	山村教室有志 (私家版)	1997	山村正光氏寄贈
三瓶清朝	ネパール紀行：文化人類学の旅	273pp/20cm	明石書房	1997	出版社寄贈
北志賀会 (編)	女性スポーツのパイオニアたちの実態調査	62pp/30cm	北志賀会	1997	飯倉登喜子氏寄贈
堀口徹夫 (編)	天山ボゴダ山群4410M峰登山隊報告書 (1997. 7. 31-8. 16)	64pp/26cm	岩手大学山の会	1997	発行者寄贈
桂俊夫	京・北山四季讃歌：桂俊夫写真作品集	/30cm	求龍堂	1997	著者寄贈
地球の歩き方編集室 (編)	ヒンディー語・ネパール語 / 英語 (旅の会話集 No.8) [改訂2版]	316pp/17cm	ダイヤモンド社	1997	平石欣也氏寄贈
読売新聞前橋支局 (編)	上州山歩：GUNMA	215pp/21cm	読売新聞社	1997	出版社寄贈
今西組社史編集委員会 (編)	今西の世紀 (1897-1997)：今西組創業100周年記念誌	87pp/30cm	今西組	1997	発行者寄贈
Reginald J. Farrer	The Garden of Asia: Impressions from Japan	296pp/20cm	Methuen	1904	購入
Alan Lyall	The First Descent of the Matterhorn				
	: A Bibliographical Guide to the 1865 Accident & its Aftermath	674pp/26cm	Gomer Press	1997	購入

に変化していくのもよくわかる。
パークレンジャーになるための資格や仕事の内容、サブレンジャーや自然公園指導員との違いなども第三部で詳しく説明しており、この仕事に対する理解を深める好著である。

(三好まき子)

一九九七年五月 八坂書房発行
二二三ページ 千八百円

小野有五・著
『北海道森と川からの伝言』
MESSAGES from NATURE

本書のもとになった北海道新聞土曜夕刊の連載コラム「自然からの伝言」は、一九九六年五月に始まって一年間五十回の連載を続け、毎月ひとつのテーマで書いたもので、ちょうど十二章の本ができた。

「自然の声を聞くのは、自分の耳であり、体である。イキモノとしての私たち自身が、ひとつの自然なのだ。その感覚を大切にしたい」と北海道大学大学院地球環境科学研究科教授、自然保護の活動家である著者は「あとがき」で述べている。

人類の発展とともに、地球環境問題が深刻さを増し「温暖化防止京都会議」で国際的に地球温暖化防止対策が討議される、待ったなしの今日の問題である。

地球の大气が、実は生物自身が作り出したものであり、地球の環境は、そこに生きる生物によって見事に自己調節されている。―ガイア仮説―「人間だけが今それを壊そうとしているのである。自然のシステムと社会のシステムとの間に起きている大きなしきみ、歪みを取り除くための有効な「しくみ」が欠如しているのである」と著者はコラムで人と自然とのかわりを、多彩な切り口と柔らかな口調で語りかける。一読をお薦めしたい好著である。(三沢 三)

一九九七年七月 北海道新聞社発行 二九〇ページ 千八百円

東京グリーンホテル 都内に3店舗654室

各種ご宴会、ご会合にご利用下さい



水道橋店 ●千101 東京都千代田区三崎町1-1-16 TEL.03-3295-4161

御茶ノ水店 ●千101 東京都千代田区神田淡路町2-6 TEL.03-3255-4161

後楽園店 ●千112 東京都文京区後楽1-1-3 TEL.03-3816-4161

会務報告

【十二月理事会】

日時 平成九年十二月十日(水) 十八

時三十五分〜二十時二十五分

場所 日本山岳会会議室

出席者 斎藤会長、小倉、大森、竹内各副会長、吉永、伊丹、熊崎、絹川、勝山、村井、飯田、鯉坂、増山、大蔵、宇田川、宮崎、坂本各理事、石橋、神崎各監事、平山、穴田、中川、中村各常任評議員
 【委任】大屋、田邊、森各理事、長尾、平野各常任評議員

十二月六日、新高輪プリンスホテルで開催された年次晩餐会、支部長会議報告 吉永

【審議事項】

(一) 写真複写許可願の件 吉永

①富山県カルデラ砂防博物館建設担当より、ウェストン、横有恒、冠松次郎会員の複写願。承認

②宇奈月町歴史民族資料館展示の「特別展・冠松次郎と黒部溪谷」の中の写真三点の複写依頼が村岡由貴夫会員より出されたが、主催の「岳人」及び家族に版權があるとの解釈。保留

(二)「山」写真掲載許可願の件 吉永

(株)山と溪谷社より月刊「山と溪谷」二月号に「山」八月号表紙の「書影」

掲載願が出された。承認

(三) 平成九年度事業報告書、一〇年度予算要求書の件 吉永

各委員会は九年度事業報告、十年度予算要求を二月二日までに。了承
 (四) 秩父宮記念賞の件 竹内副会長

選考委員は会長、副会長、総務、財務担当理事の参画を求め、五月総会に提案、十二月の年次晩餐会で顕彰の運びとしたい。承認

(六) 海外登山基金の件 伊丹

青年部カンチェンジュンガ登山隊、他一隊の助成申込がある。了承

(六) ネパール国際博物館募金 伊丹

十二月六日の支部長会議で各支部長、事務局担当者にも募金委員を委嘱し、晩餐会のしおりにもお願い書をつけて会員募金(一口五千元 二口以上)要請をしたが、各理事も担当委員会に持ち帰り協力。承認

(七) 高頭仁兵衛「日本山嶽志」の件 小倉副会長

岐阜支部高木泰夫会員より現代語訳出版の予定があり、各地山名、標高などについて、各支部照会の際は善処よろしく。了承

【討議事項】

○中高校対策の件(前回より) 吉永

・オリエンテーションのあり方

・会員紹介推薦について
 ・「山」などでの適切なアドバイス
 ・情報(図書)などへの対応

・入会者に対する指導のあり方(ボランティアかプロガイドでやるか)
 ・入会者の十年間の意識レベルの差
 ・自力による集会
 ・山行への積極参加
 ・全会員アンケートの実施
 その他が論じられ、集委員会・勝山理事に集約を依頼。承認

【委員会報告】

●学生部委員会・宮崎

①十一月十五日、法政大学にて大学山岳部監督会議を開催。国内二十七大学、九十名、韓国大学山岳連盟加盟六名の参加、本会より竹内副会長他八名出席。

②第三十四回マラソン大会が十一月十六日、皇居周辺で十七大学、約百名の参加で開催、盛会裡に終了。

●自然保護委員会・大蔵

①平成九年度全国集会を十月十八、十九日、東海支部の協力で三重県鈴鹿市で開催。八支部、約六十名参加。

②平成十年度の全国集会は十一月十四、十五日、京都美山町で開催予定。

③自然保護シンポジウム「登山と自然保護を考える」を十一月二十二、二十三日、神奈川県立藤野芸術の家で開催。参加約百六十名。

●山岳研究所運営委員会・坂本

平成九年度宿泊人数七百八十四名(会員三百四十五名、非会員四百四十一名、小児二十八名)、収入三百八

万二千五百円。

●OAシステム(パソコン)導入について
 計画書、見積書での検討(リースか買取りか)、再調査にあたる。絹川

●会員異動

物故

大屋悌二(四八四〇) 9・12・26
 山田博茂(四二七八) 9・12・15
 大松淳育(二〇六九四) 9・9・12
 大久保五郎(九三〇二) 9・10・29
 小川泰平(二〇四一五) 9・11・23
 寺本健一(二〇四七二) 9・11・2
 仲谷千秋(九八七七) 9・11・20
 退会

小田哲夫(六三九八) 9・12・31
 根本 紀(六一九四) 9・12・31
 川田盛人(九八八三) 9・12・31
 河村忠明(九九六九) 9・12・31
 小橋廣幸(九二一六) 9・12・31
 朝日生命交友会山岳部(四八五一)
 東京印書館山岳会(五九八〇) 9・12・31

那須博文(二〇七六五) 9・12・31
 山形歳之(九八四九) 9・12・31
 後藤あずみ(二〇八〇九) 9・12・31
 岡本陸人(六二七六) 9・12・31
 ピーター・オーバーマイヤー
 (六八九三) 9・12・31
 改姓
 木村かずみ(二〇七九五) ↓高原

INFORMATION



◆ビデオで楽しむスイス・アルプスの夕べ フィルムビデオ委員会

スイス・アルプスは変化に富む多くのトレッキングコースがあり、雄大な氷河の山、豊かな高山植物などは訪れる人々を魅了します。

日時 三月六日(金) 十八時三十分

場所 山岳会ルーム

会費 三百円(茶菓子代)

ビデオ題名

①「マッターホルンを歩く」

②「ユングフラウを歩く」

◆初級者対象山岳スキー研修会

指導委員会

初級者向きの本格的な山岳スキーの研修会を開催します。

日時 三月二十一日(土)～二十二日(日)

場所 ハケ岳・枯木山荘周辺を予定

内容 ①山岳スキー基礎技術

②冬山における遭難対策

講師 熊崎和宏(指導委員会理事)

松原尚之(指導委員会委員長)

費用 二万円(小屋泊、宿泊費、食

費などを含む)

申込 熊崎和宏

〒一八〇 武蔵野市吉祥寺北

町三一五―二四―三〇二

*詳細要項をご希望の方は官製葉書

でお申し込みください。

◆探索山行「フォッサマグナ西縁の

山の地形を探る」 科学委員会

日時 四月十八日(土)～十九日(日)

山行 日向山、茅ヶ岳

一日目 甲斐駒ヶ岳前衛の日向山に登り、甲斐駒東面から日向山

一帯の地形について現地での講義を受けます。

二日目 茅ヶ岳登山の後、鎌倉市観光協会主催、山梨支部協賛の深

田祭に参加予定。

講師 有井琢磨会員

費用 一万二千元(予定)

宿泊 山梨県長坂町のペンション

定員 先着二十五名

申込 三月十日までに 〒二〇三

東久留米市浅間町三一―一六

古市 進まで葉書で。

TEL・〇四二四―二二―八五六九

◆クロスカントリー・セミナー

山げらの会

妙高高原でクロスカントリーを楽しむ

しませんか。ベテラン講師が指導

します。初心者も安心してご参加を

日時 三月十四日(土)～十六日(日)

場所 千九四九―二一 新潟県中頸

城郡妙高高原町池ノ平温泉

宿泊 池郷家

講師 横山久雄氏(オリンピック選

手などの育成者)

費用 二万円(宿泊費、講師料を含

む)

申込 二月末日までに(先着順)

早川瑠璃子 TEL・FAX 〇三一

三三〇七―一九九一

鈴木裕代 TEL・〇三―三四二

八―五〇八〇

◆花の百名山ハイク

94 同期会

ヒメイワカガミ、キクザキイチゲ、

マメザクラなど可愛い花を観賞。石

井文雄同期会員(神奈川県自然公園

指導員)の企画で、当日は解説もい

たします。他年度の同期会員の参加

大歓迎です。

日時 五月二十三日(出)

場所 箱根・神山

集合 八時三十分 JR東海道線小

田原駅南口・改札口

行程 小田原駅八時五十分発―伊豆

箱根バス湖尻行きに乗車―大

涌谷下車―早雲山分岐經由神

山(昼食)―駒ヶ岳―バスで

小田原に戻り解散(十六時)

申込 不要 自由参加(小雨決行)

持物 弁当、水筒、雨具、記名名札

問合せ 石井文雄

TEL・〇四五―三四一―七二四三

◆平成十年度団体傷害保険募集

総務委員会

今年度の団体傷害保険募集を行います。保険期間は平成十年三月三十一日より一年間となります。募集要項は一月下旬に各会員宛郵送いたします。

なお、現在すでに加入されている場合は、自動継続となりますので、手続きは不要です。(既加入者には、申込内容の確認及び継続の確認書類を郵送いたします)

当保険は平成七年に導入され、三年目となり、現在七百五十名の加入があります。幸い今日までに遭難捜索事故は起きていないものの、昨年は海外での死亡事故が発生してしまいました。

山行活動上事故に対応できる共済及び保険の加入は必須です。現在未加入の会員には是非加入されますようお願いいたします。

日本山岳会会報 山 633 号

1998年(平成10年) 2月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京 (03)3261-4433

FAX 東京 (03)3261-4441

発行者 斎藤惇生

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社